

「伊賀観世系譜」の虚実

宮本圭造

表章氏の『昭和の創作「伊賀観世系譜」』(ペリかん社。平成二十二年九月)が刊行されたのは、今からちょうど三年前のことである。氏は発刊の直前に急逝されたため、本書が文字通りの遺著となったが、多くの人が眉唾物と考えていながら、長年真贋論争に決着の着かなかった伊賀上島家文書「伊賀観世系譜」を偽文書であると見事に論証していく手際の上さど周到さに、圧倒されながら読んだことを思い出す。本書により、「伊賀観世系譜」が昭和以降に「捏造」されたものであることは、もはや誰の目にも明らかになったといえよう。

「伊賀観世系譜」は、郷土史家久保文雄氏によって発見された、伊賀の旧家・上島家所蔵の観世家関係の系譜資料である。そこには、観阿弥・世阿弥父子とその家族をめぐる、それまで知られていたよりも遙かに具体的な情報が書き留められており、観世家に関する注目すべき新資料の発見として、当時、一般の関心を広く集めることになった。例えば、観阿弥の実父は伊賀浅宇田の領主・上嶋慶信入道なる人物で、母は楠正遠の娘であること(つまり観阿弥と楠正成とは伯父・甥の関係)、

世阿弥には五人の兄弟がいて、長男は伊賀の杉内に住し、その子孫は服部氏を名乗っていること、世阿弥の母は伊賀小馬多の領主・竹原大覚法師の娘であることなどで、これらももし事実だとすれば、観阿弥・世阿弥の親子に関して、従来知られていなかった新たな知見が大幅に加わることになるからである。

しかし、いまや「伊賀観世系譜」は昭和に入って作成された偽文書であるという評価が確定し、夢のような大発見は幻に過ぎないことが明らかになった。にもかかわらず、今更ながら、「伊賀観世系譜」の虚実」というタイトルを掲げたのは、真贋論争はさておき、観世家と伊賀との関わりについては、もう少し考え直してみる必要があるのではないか、と思うからである。私がまだ大学院生だった時、日本中世史の研究で高名な脇田晴子氏が非常勤講師として来講され、能をはじめとする中世芸能について取り上げられた。その中で、脇田氏が「伊賀観世系譜」に触れ、「偽文書だと思われるが、火のないところに煙は立たないくらいの真実はある」とおっしゃったのが大変印象に残っている。その発言の意図に

ついて、いまだご本人に確認の機を得ていないが、悪党と呼ばれた中世伊賀の郷土が、大和猿楽や、河内の楠氏と接点を持つのは十分に有り得る、というようなことではなかったかと勝手に想像している。

「伊賀観世系譜」は、観阿弥が伊賀の上島慶信の子として生まれて以来、代々、伊賀と深い繋がりがあったとする。これはもちろん何の根拠もない謬説であるが、観世家が伊賀と縁のある家系であったのは確かである。すなわち、『世子六十以後申楽談儀』は、「伊賀の国、服部(平氏也)の、杉の木と云人の子息」が「おうたの中」という人物の養子となり、この男と京都の妾との間に生まれた子がさらに山田の美濃大夫の養子に迎えられ、三人の子供を儲け、その三男にあたるのが観阿弥である、と記している(長男は宝生大夫、次男は生市大夫)。世阿弥が自らの家系を語るのに、山田猿楽の美濃大夫の系譜を言わず、血縁上は伊賀の服部氏の流れであることをあえて語っているのは、世阿弥自身、伊賀服部氏の血統であることを強く意識していたからであろう。そうした意識は後の観世家にも受け継がれ、戦国期の伝承を伝える「観世小次郎信光画像賛」以下、観世家の系譜はおしなべて「伊賀州ノ甲族」「服部氏」を観世家の祖と位置づけている。『世子六十以後申楽談儀』には右の他にも、伊賀の地名が登場する。翁面について言及する中で、「此座の翁は弥勒打也。伊賀小波多にて、座を建て初められし時、伊賀にて尋ね出だしたてまつし面也」と記するのがそれであ

る。ここに見える「此座」は観世大夫も所属する結崎座を指すとする説が有力だが、観世大夫の一座、すなわち観世座を指すと考える研究者もあり、いまだ決着を見ていない。また、右に「伊賀小波多にて」とあるのは、座が創設された場所を指すのではなく、その後の「伊賀にて」の傍注と見て、弥勒打の翁面が発見された場所を示す記事と解するのが、香西精氏以来の通説となつてゐる。そう考えるのは、大和猿楽の古い座である結崎座が大和から離れた伊賀の地で創設されるはずがない、という大前提があるからなのだが、この記事については、観世座が伊賀小波多の地で創座されたことを伝えるものと解して、何ら矛盾はないと私は考えている。詳細はまた別の機会に述べたいが、『世子六十以後申樂談儀』で世阿弥が言及する「座」は、いずれも大夫によつて率いられた比較的小規模な「座」であり、興福寺参勤の際にのみ結成され、複数の大夫の座で構成される結崎座のような「総座」を指す例がほとんど見られないこと、前者の「座」は大夫を中心とする規模の小さい組織であつて、座の結成・解体は比較的容易に行われたものと推察され、大和猿楽の観阿弥が隣国の伊賀で座を建てることは十分にありえること、などが、そう考へる理由である。

『世子六十以後申樂談儀』附載の「定 魚崎御座之事」は、「伊賀・伊勢・山城・近江・和泉・河内・紀ノ国・津ノ国」にありながら、多武峰の猿楽に参勤しなかつたものについて、「長ク座ヲ逐ウベシ」と記している。その筆頭に

「伊賀」の国名が挙つてゐることは、大和猿楽が伊賀にも盛んに進出してゐた状況をよく物語つていよう。しかも、伊勢以下の諸国にはそれぞれ在地の猿楽座が確認されるのに、伊賀の地には專業の猿楽座がいたことを伝える史料が皆目伝わらない。つまり、伊賀国は猿楽座の空白地帯なのであり、そこに大和猿楽の進出の余地があつたといえる。観阿弥は美濃大夫の養子の三男坊であつた。嫡男の宝生大夫、次男の生市大夫が大和を中心として活動してゐたとすれば、三男の観世大夫は新たな舞場の獲得のために、伊賀での活動に活路を求めたことも十分に考へられよう。

もう一つ、補強資料として蓑笠之助の系譜類を挙げておきたい。この蓑笠之助は、天正十年、本能寺の変の後、徳川家康が堺から大和を経て三河に逃げ落ちる際、伊賀越えの手助けをしたことで知られる人物で、もともとは服部平大夫を名乗つてゐたが、蓑笠を差し出して家康の窮地を救つた功により、蓑笠之助の名前を賜つたという。その笠之助には於相という娘がいた。最初、西郷右京進に嫁いてゐたが、夫が甲斐で戦死した後、実家に帰つてゐたところ、徳川家康に見初められ、その側室に迎えられる。そうして家康との間に儲けた子供が、後に二代將軍となる秀忠、清洲藩主の松平忠吉の二子で、つまり、蓑笠之助と二代將軍秀忠とは、祖父と孫という間柄なのであつた。そうしたことから、『徳川諸家系譜』『柳宮婦女伝』『蓑笠之助伝』（内閣文庫蔵）など、幕府関係の資料には、蓑笠之

助家の系譜がいくつも収められてゐる。その一つ、『視聽草』（内閣文庫蔵）は、家康に仕えた蓑笠之助の孫、巳野笠之助（元禄二年没）の代になつて、蓑家は宝生座付の御役者に配属されたとする。しかし、幕臣が途中から御役者に召し出されるというのはきわめて異例であり、蓑家はもともと猿楽の家系であつたと考へるのが自然である。そして、「蓑」（巳野・美濃）という姓が示すように、同家が山田の美濃大夫の系統を引く大和猿楽の末裔であつた可能性はかなり高そうである。その蓑家がやはり伊賀の服部氏を先祖としてゐるのである。すなわち、『蓑笠之助伝』によれば、同家は伊賀の服部右馬之助に始まるという。このことは、先の観世家の伝承ともあいまつて、大和猿楽と伊賀との深い縁をあらためて想像させる。『徳川諸家系譜』『柳宮婦女伝』もこの点に着目して次のように記している。

笠之助本姓服部にて、猿楽の列なるを考れば、観世大夫も本姓服部なれば、始其親類ならん。観世も元祖服部観阿弥は足利將軍義政公の同朋也。其先服部某と云て楠正成が家臣の由なれば、笠之助も先祖は武士といへ共、其比は観世杯と同敷猿楽なるべし。

そして、ここに楠正成が顔をのぞかせてゐる点も興味深い。「伊賀観世系譜」が蓑家の系譜を参照した痕跡は見当たらないが、例の観阿弥・楠正成縁者説の淵源は、ひよつとするとこんなところにあるのかも知れない。

（法政大学能楽研究所教授）